

社会資本の維持管理・更新を担う技術者諸君へ

新しい年が明けてしばらく経つが、2014年は甲午^{きのえ}の年である。「甲」は物事の始まりを意味し、前の十年に通用していたものが通用しなくなることを表す。このことから、「旧体制が破れ革新が始まる」という意味らしい。午年は、十二支の中間に位置し、「草木の成長期が終わり、衰えを見せ始めた状態」を示す。太田昭宏国土交通大臣は、昨年を「メンテナンス元年」と位置づけた。まさに本年は、衰え始めた社会資本を維持管理・更新するために、「陋習^{ろうしゅう}を破って、革新の歩を進めなければならない」年である。そういった観点から、本誌の読者である国及び自治体の建設関係職員（技術者と呼ぶ）にとっての「甲午の年」を論じてみたい。

新たに構築する社会資本や、再生・維持補修を施した構造物自体は「しなやかさ」を持っていないなければならない。同時に、それを処方する技術者自身も「しなやか」でなければならない。禅語に「竹有上下節（竹に上下の節有り）」とある。節目の多い竹は、どんなに強風が吹こうが、しなやかにしななって簡単に折れることはない。技術者自身も竹のようなしなやかな心と頭脳を持つことが大切である。未来の人々が、快適で安全・安心な生活や高い経済活動を享受するためには、平成の時代に生きる技術者が、「次の世代に何が大事か？」を常に考え、答えを見つけ出さなければならない。河井醉茗^{すいめい}の詩に「ゆずり葉」がある。その詩の一節に次のような文がある。「子供たちよ

お前たちは何をほしがらないでも すべてのものがお前たちにゆずられるのです。太陽のめぐるかぎり ゆずられるものは絶えません。〔中略〕 かがやける大都会も そっくりお前たちがゆずり受けるのです。〔中略〕 世のお父さん お母さんたちは 何一つ持ってゆかない。みんなお前たちにゆずってゆくために いのちあるもの よいもの 美しいものを 一生懸命に造っています。」まさに、無償の愛と知をもって、次世代に社会資本を引き継いでいく技術者の矜持がそこにある。

大切な社会資本は、「いつも機能を損なわず、そこにある」と皆が信じている。技術者は、その期待に応えなければならない。どんなに立派で高名な医者でも、人間を若返らせることはできない。しかし、技術者は、老齢化した構造物を若返らせ、時には誕生時よりも寿命を延ばし、高機能化することすら可能である。社会資本に向き合う技術者は、こんなにすばらしい能力を持っている。陳延之『小品方』に「上医は国を医し、中医は民を医し、下医は病を医す」という言葉がある。医者を志す人が耳にするとされているが、まさに社会資本を管理する技術者にとっても常に心に留め置き、国の平安のために活動する総合医たらねばならない。

このために、技術者は構造物を丁寧に「見る」ことが大切である。つまり、構造物に対して管理者・専門技術者としての最高の「見識」を示すこ

岐阜大学 理事・副学長

やしま
八嶋

あつし
厚



とが重要である。定期点検や緊急時の点検において「^み覧」ことだけで済ますことはできない。第三者によって与えられた詳細資料を「^み閲覧」するだけでは「^み見識」を示すことはできない。少なくとも私にはできない。現場を訪れて「^み視る」だけでも不十分である。対象とする現場について、限られた部分にのみ集中するのではなく、全体を俯瞰することはもちろん重要であるが、「^み視察」では不十分である。管理者・専門技術者にとって、重要なことは、1)「^み観る」ただし観察する、観測すること、2)「^み診る」ただし診断すること、そして3)「^み看る」ただし看護方法を提案することであろう。丁寧に観察して、時には計測して、対象物の安全性評価（^み診る）を実施しなければならない。危険と判断された対象物については、対策工法（看護方法）を提案しなければならない。これらのステップを踏んでこそ、現場についての「^み見識」が示せるものと信じている。構造物の点検と維持管理において、「^み見る」という見識を示すためには、「^み覧る」→「^み視る」→「^み観る」→「^み診る」→「^み看る」といった一連のステップが必要である。

構造物を高頻度で漠然とみてはいけない。点検は、頻度はもちろん重要であるが、点検の質も重要であることを忘れてはならない。「^み見る」ためには、私たちは五感を研ぎ澄ませて、構造物に向き合わなければならない。五感で不十分なときには、計測・観察機器などの助けを借りるのもよか

ろう。本誌には、「メンテナンスのポイント」と題した小コーナーがあるが、そこではカバ君が社会資本を丁寧に見ている。体重が3トンにも達するカバは、水面に顔を出しているとき、耳、目、鼻、口だけが水面すれすれに現れ、四感をフルに発揮して周囲の警戒を怠らない。私たちも、五感に加えて、これまでに蓄積したさまざまな知識も最大限発揮して、構造物を見続けたいと思う。

社会資本の維持管理を担う技術者のみなさんは、学校を離れて久しく、数多くの経験を積み重ねている。社会資本の維持管理・更新に関する知識も膨大であることは想像に難くない。しかしながら、見識を示し、さらには実行するための胆識を得るには、継続的な学びがさらに必要である。伊能忠敬の言葉に、「人生に結はないのだ。人間は生涯勉強だ。だから、人間は死ぬまで学習を続けなければならない。すなわち、人間の一生は起承転結ではなく、起承転転なのだ。最後まで命を燃料にして、めいっぱい燃え続けなければいけない。そして、少なくとも自分の営みが、少しでも人様のお役に立つような燃え方をしなければいけない」とある。幕末の儒学者佐藤一斎の三学戒に「少くして学べば壯にして為すあり。壯にして学べば老いて衰えず 老いて学べば死して朽ちず」とある。技術者としての矜持を持ち、継続的に学び、「社会資本は老齢化すれども、老朽化は許すまじ、長生きから長活きへの転換」を目指そう。